様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2018～2022
課題番号：１７ＫＫ００１９

研究課題名（和文）ロシア教会における君主主義の系譜：在外ロシア教会からツァレボージュニキまで

研究課題名（英文）Genealogy of Monarchism in the Russian Churches: From ROCA to Tsarebozhiniki

研究代表者
高橋　沙奈美（Takahashi, Sanami）

九州大学・人間環境学研究院・講師

研究者番号：５０７２４４６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,900,000円
渡航期間：　８ヶ月

研究成果の概要（和文）：ロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世は、革命以前の社会あるいは大国ロシアの象徴である。2000年にロシア正教会で「受難者」として列聖されて以来、現在に至るまでもっともポピュラーな聖人の一人でもある。しかし、そのようなニコライ二世像は、1980年代後半以降に亡命ロシア人社会から「輸入」されたものでもある。
本研究は、1920年代以降、亡命ロシア人社会において、ニコライ二世に神聖性が付与されていくプロセスについて明らかにした。そのうえで、聖人ニコライ二世の存在が、東方正教の信仰・ロシア語そして歴史的記憶を共有する「ロシア世界（ルースキー・ミール）」の中心に据えられるものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2014年にウクライナ東部におけるドンバス紛争が始まって以来、ロシアでは「ロシア世界」が重要なキーワードになっている。この概念をけん引しているのがロシア正教会であり、聖人ニコライ二世は、「ロシア世界」を大衆にわかりやすく伝える視覚的なイメージの一つとなっている。
在位中には不人気な皇帝であったニコライ二世を、信仰心に篤く、伝統的な家族を重視し、自己犠牲をいとわない聖人として描き出したのは、亡命ロシア人社会であった。本研究は、亡命社会のロシア・ナショナリズムがソ連末期の社会に引き継がれたこと、また2000年のロシアにおけるニコライ二世一家列聖が、ロシア正教会の重要な転機であったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Nicholas II, the last emperor of the Russian Empire, is a symbol of pre-revolutionary society and of Russia as a great power. Since his canonization as a "Passion bearer (strastterpets)" in the Russian Orthodox Church in 2000, he has been one of the most popular saints to this day. However, such an image of Nicholas II was also "imported" from the Russian diaspora community after the late 1980s.
This study clarified the process by which sanctity had been conferred on Nikolai II in Russian diaspora society since the 1920s. It also clarified that saint Nicholas II was placed at the center of the "Russian world (Russkiy mir)," which shared the Eastern Orthodox faith, the Russian language, and historical memory.

研究分野：宗教社会学

キーワード：ロシア　ロシア正教会　聖人崇敬　ディアスポラ　ニコライ二世　ロシア世界

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

20 世紀のロシア正教会は、反宗教を掲げるソ連の党＝国家体制による厳しい管理下に置かれていた。1920－30 年代は、ロシア正教会に対しても徹底弾圧の政策がとられていたが、独ソ戦（大祖国戦争、1941－45 年）という総力戦の中で、宗教団体に対する管理・抑圧・理由が重視されるようになった。戦後のロシア正教会においては、聖人の列聖という教会生活にとって極めて重要な出来事さえ可能となったが、それは信者らによる崇敬や奇跡の報告が可能にした宗教的な決定ではなく、むしろ当時のソ連が向き合っていた国際情勢を考慮に入れたうえでの政治的判断であった。

そのような状況下、ロシア正教会は、1917 年革命後に国外に亡命した在外ロシア正教会の動向に敏感にならざるを得なかった。在外ロシア正教会には、反共的、君主主義的な知識人やロシア・ナショナリストが多く集まっていたし、ソ連体制に脅威を及ぼしうる外国勢力とも結びついていると考えられていた。ロシア正教会が在外ロシア正教会との断絶を示し、これを批判することが、ソ連国内でロシア正教会が生き残るためには極めて重要だったのである。

第二次世界大戦後、在外ロシア正教会が「ロシアの新致命者（殉教者）」の筆頭としてニコライ二世一家を列聖する準備を始めると、ロシア正教会はこうした動きがソ連国内に影響を及ぼさないよう、最大限の注意を払う必要が生じたと考える。というのも、ニコライ二世崇敬は 1917 年革命以前の体制に対するノスタルジアの表明であり、ソ連体制への批判へと容易に結びつくものだったからである。

しかしながら、ソヴィエト・ロシア本国の警戒にも関わらず、ニコライ二世一家崇敬は 1980 年代からソ連社会にも浸透し、1990 年代には君主主義的な言説と結びついて、「ツァレボージュニキ」と呼ばれる異端の集団を生み出すに至った。彼らはロシア皇帝（ツァーリ）を三位一体の神（ボーグ）であるキリストになぞらえ、ロシア選民思想と反ユダヤ主義の強烈な主張を行った。すなわち、ロシアの民（ナロード）はユダヤ人（共産主義者）にそそのかされて、地上における神の代理人たる皇帝を革命によって排除するという罪を犯した。ニコライ二世はロシアの民の罪をあがなうために、死を受け入れた。すべてのロシアの民が、この罪を自覚し、ニコライ二世の前で許しを請うとき、ロシアは再びその庇護のもとに聖なるルーシとして復活するというような考え方である。

ロシア国内でも、ニコライ二世一家の列聖を待望する声が上がったが、彼らは信仰のために死を受け入れた（殉教）のではなく、政治的理由によって銃殺されたこと、またその生前において列聖に値するほどの宗教的偉業を遂げたわけではないことから、列聖に反対する声も強かった。しかし、2000 年に教会の指導部は皇帝一家を「受難者」として列聖することを決定した。

この列聖は、現代のロシア正教会の転機であったといえる。すなわち、政治権力に対して批判的な態度や、保守からリベラルまでの多様性を保つ教会から、政治権力を翼賛し、ロシア中心主義・大国主義、伝統という名目での封建的価値観を重視する教会へのターニング・ポイントが、ニコライ二世一家の列聖であったともいわれるのである。

以上のように、ニコライ二世に対する崇敬から列聖に至るプロセス、またその崇敬の内容を明らかにすることは、ロシア社会の右傾化を明らかにするものではないかと考えた。さらに、こうした言説に含まれる「君主主義」が、すでに帝政を失った現代ロシアの文脈において、いったい何を意味するのかを丁寧に検討する必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究は、ニコライ二世一家に対する崇敬から列聖に至るまでの歴史的展開について、第二次世界大戦後の亡命社会とソヴィエト・ロシア本国を対象に調査・分析するものである。さらに、ソ連解体後のロシア正教会において、ニコライ二世一家の列聖をめぐって、どのような議論が行われたのかを再検討する。

これらによって、亡命社会から現代ロシアに至るまでの君主主義の系譜を明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

まず、ロシア・ディアスポラとソヴィエト・ロシアの両社会において、ニコライ二世一家暗殺の 1918 年以降、在外ロシア正教会による列聖の 1981 年までの期間、ニコライ二世の表象がどのように変化したのかを明らかにすることを目指した。ソヴィエト・ロシアでは、ニコライ二世というテーマ自体が、長らく歴史的分析が許されない対象であり、同時代の刊行物などは非常に限られていた。ニコライ二世は無能な皇帝でロシアを破滅に導いたというもの以外の歴史解釈は、ソ連体制の否定に即座につながる危険な可能性を秘めていたためである。そのため、限られた定期刊行物や回想録、また 1980 年代のスヴェルドロフスク（現エカテリンブルク、皇帝一家暗殺と埋葬の地）において、ニコライ二世崇敬をけん引した人物の遺族や友人へのインタビューを行った。

また、ロシア・ディアスポラ社会におけるニコライ二世崇敬については、亡命者らが発行していた定期刊行物、在外ロシア正教会の刊行物を主要なデータとし、そのうえで在外教会によるニコライ二世列聖を決定した高位聖職者のうち、現在も唯一存命であるミュンヘンおよびドイツ府主教に対するインタビューを補足的に用いた。

最後に、2000 年のロシア正教会におけるニコライ二世列聖については、当時の定期刊行物や教会が発行する定期刊行物に掲載された議論を基本的なデータとした。在外調査の期間中に、子の列聖の準備に携わった人々に対する調査を予定していたが、新型コロナウィルス感染防止のための渡航制限により、このインタビュー調査は実施できなかった。

４．研究成果

１）ディアスポラ社会とソ連におけるニコライ二世の表象をめぐって

1918 年の処刑から 1981 年の列聖まで、ディアスポラ社会のみならずソヴィエト・ロシアにおいても変化したニコライの生涯に対する解釈を中心に、ニコライ二世崇敬の形成過程を明らかにした。1920-30 年代、ソヴィエト・ロシアでは、ニコライ二世一家に対する裁判なしの銃殺を「民衆の復讐」として正当化すべきであるという議論が主流であった。一方で、この時期の在外ロシア正教会を中心としたディアスポラ社会は皇帝とその家族を、革命とそれに続く社会混乱の「犠牲者」として描き出すことで、同じく革命によって祖国を失った彼らを象徴する存在として、ニコライ二世に対する再評価が始まった。さらに、イオアン（マクシモヴィッチ）大主教のような高名な高位聖職者らによって、君主を捨てて革命を受け入れるという罪を犯したロシアのナロードのために、ツァーリが自らを生贄としたのだと主張した。

第二次世界大戦後、在外ロシア正教会は、ソ連党＝国家体制の厳重な管理下に置かれたロシア正教会の権威を顧みることをますますしなくなっていった。すなわち、ソ連体制化のロシア正教会は、党＝国家の意向を汲んだ言動以外許されていないのであり、自由な教会として、革命以前の宗教的伝統を精神的に継承しているのは、むしろ在外ロシア正教会であるという立場を強調した。その流れの中で、戦後の在外ロシア正教会は、本国教会とは別個の列聖に取り組み始めたのである。

1981 年の列聖に向けては、在外ロシア正教会の中でも異論があり、議論が続けられた。しかし、決定的に大きな役割を果たしたのは、1970 年代－80 年代初頭のソヴィエト・ロシアで活躍を始めた反体制派であった。ソ連体制に異論をもつ反体制派の聖職者や信者は、ニコライ二世の列聖が体制にとっては大きな脅威となると同時に、反体制派にとっては力強い支援になることを主張し、在外ロシア正教会に列聖を迫ったことを明らかにした。

２）2000 年のニコライ二世一家列聖以降のロシア正教会の変容

ロシア正教会は、2000 年にニコライ二世一家を列聖するにあたって、ニコライ二世を「ロシアの贖い主」あるいは「ロシアのキリスト」などとして神格化する熱烈な崇敬者たちを「ツァレボージュエ」という異端として退けた。しかし、処分を受けたのは高位聖職者にとどまり、ロシア正教会には実質的な「ツァレボージュニキ」が多数残存することとなった。

彼らは強い為政者に対する畏敬の念を持ち、ニコライ二世に続いて、イワン雷帝やスターリンらの列聖を求める運動を展開した。彼らが理想とするのは、帝政期に存在したと彼らが考える保守的で伝統的な社会秩序であり、そこでは社会が家族的・有機的なつながりを持って強い為政者の統治下におかれる。現代ロシアにおいては、「伝統的・精神的価値」が社会的にも政治的にも極めて重要なキーワードになっているが、こうした価値観を重視する人々の中でも、特に帝政期に対する強いノスタルジーを持つ人々が「君主主義者」を自称していることが明らかになった。彼らはロシア正教会の内部においても、極右に位置づけられる。1990 年代にはより広範な多様性を保っていたロシア正教会が、2000 年代以降、こうした君主主義者ら、極右の意見に傾いており、それは 2022 年 2 月に始まったウクライナに対する全面侵攻後、さらに加速の度合いを強めていることを確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 高橋沙奈美	４．巻 107号
２．論文標題 皇帝が捧げた命	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ロシア史研究	６．最初と最後の頁 30-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Markova N., Karaseva S., Pogodina I., Takahashi S., Arinin E.	４．巻 －
２．論文標題 Building Legal and Sociological Differentiation of Confessional Discussion (Local, Global and Glocal Context in Belarus, Russia and Japan)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Svecha-2020	６．最初と最後の頁 346-369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 高橋沙奈美	４．巻 52
２．論文標題 コロナ・パニックと東方正教会（１）この世の終わりとよみがえったラスプーチン	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ゲンロンβ	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Е.И. Аринин, Н.М. Маркова, С. Такахаси	４．巻 4
２．論文標題 Термин религия в контексте глокального подхода к межкультурной коммуникации в России и Японии	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Концепт: Философия, религия, культура	６．最初と最後の頁 164-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24833/2541-8831-2019-4-12-164-177	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 高橋沙奈美
2．発表標題 遂行する〈記憶〉――再現されるニコライ二世埋葬とその聖性
3．学会等名 第8回北方精神研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 高橋沙奈美
2．発表標題 皇帝が捧げた命
3．学会等名 第5回北方精神研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Sanami Takahashi
2．発表標題 Tomos for Ukraine and What It Brought to Ukrainian Orthodox Society
3．学会等名 East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 高橋沙奈美	4．発行年 2023年
2．出版社 扶桑社	5．総ページ数 288
3．書名 迷えるウクライナ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Лекция-встреча. http://orthodox-bremen.cerkov.ru/category/news/page/2/

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ミトローヒン　ニコライ (Mitrokhin Nikolay)	ブレーメン大学・Forschungsstelle Osteurope・Research Fellow	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
その他の研究協力者	コストリュコフ　アンドレイ (Kostrykov Andrei)	聖チーホン正教大学・Russian Church History・Professor	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ブレーメン大学			
ドイツ	ブレーメン大学			